

「緋のあづま」の結果枝長による果実肥大の傾向と、 1年枝先端の切返しによる腋芽の動向

福島県果樹試験場 栽培部

平成17年度福島県果樹試験場試験研究成績書

1 部門名 果樹—リンゴ—整枝・剪定

分類コード 04-01-08000000

2 担当者 岡田初彦・大橋義孝・木幡栄子・佐藤 守

3 要 旨

(1) 「緋のあづま」の9月30日時点の体積指数と結果枝長の関係を見ると、1～2 c mの極短果枝ではバラツキが大きく果実の揃いが悪く、相関は低いものの結果枝長5～10 c mの中果枝で肥大が良好になる傾向が見られた。このことから、結実させる結果枝は中果枝を中心に狙っていくのが得策と思われる。

(2) 本年の1年枝上の腋芽の不発芽率は緋のあづま/実生台>ふじ/J M 7 台>緋のあづま/J M 7 台の順であった。また、腋芽の花芽率は、緋のあづま/J M 7 台>緋のあづま/実生台=ふじ/J M 7 台の順であった。

(3) 緋のあづま/実生台における1年枝先端の先刈り等による最終的な1年枝の生育は、先刈り区は発芽伸長した腋芽数はつぼ刈り区に比較しやや少なかったものの、先端新梢及び腋芽枝の伸びが良く、3区の中では中庸な生育を示した。つぼ刈り区は、発芽伸長した腋芽数は多かったものの先端新梢長が短く、腋芽も短果枝になる傾向が強く、全体的に弱い生育であった。無処理区は、発芽伸長した腋芽数が少なく、先端新梢の伸びは中庸であったものの、腋芽枝の伸長は不良であった。また、どの区でも6月時点で発芽していた腋芽が一部生育期間中に枯死し、芽がとぶことが確認された。

(4) 以上のことから、「緋のあづま」の1年枝の扱いは、5～10 c m程度の中果枝中心に結果枝として扱い、長果枝は先刈りを行い腋芽の発芽を促進して次年度の結実部位を確保するとともに、短果枝に結実した果実は摘果を丁寧に行うことにより、揃いの良い果実生産が可能になると思われる。

4 その他の資料など

平成16年度福島県果樹試験場試験研究成績書